

Τροὺς ἀσέφατους μου φάους, τοὺς κερταίους  
τοῦ Φιλάρτου, καὶ τῆς κωπῆς Τρεπέου Δάκου,  
μὲ ἀγάπην καὶ ἐκτίμησιν.

### キクラデスの子守歌

中村喜和

はじめに

### (101) 研究ノート

キクラデス諸島は南エーゲ海、つまりギリシャ本土とクレタ島のあいだに散在する大小無数といつていいほどの島々からなつてゐる。行政上は一つの県を形成し、総面積は約二五〇〇平方キロ、人口はほぼ八万人をかぞえる。県庁所在地はシロス島のエルムポリス市である。このエルムポリスに若干の造船工業を有するほか、島々の住民の生活は圧倒的に農業と牧畜に依存してゐる。研磨材に用ゐる金鋼砂、建築材としての大理石、また鉄鉱・マンガン鉱などの鉱業も有するが、その産出額は微々たるもので、むしろ最近にいたつて観光業の発達がいちじるし

い。

キクラデス諸島の中で最も大きい島はナクソスである。筆者は「地中海島嶼における文化交流の影響」を研究テーマとする海外学術調査グループの一員として、一九七七年の秋から冬にかけて主としてこのナクソス島およびシロス島において民俗関係の調査を行なつた。調査の過程で収集した資料は目下整理中であるが、ここではとくに二つの島で採録した子守歌について書いてみたい。

(1) 整理済みの資料の一部はすでに次のような形で発表された。「フィロティ村の日々」『月刊百科』一九七八、五月号、「プラタナスの木の下で」『窓』二五号（一九七八、六月）、「人魚の贈りもの」『民族学』二巻三号（一九七八、七月）。

「ナクソスの村々はアピラントスを唯一の例外として、民俗学の見地からまだ系統的に調査されたことがない」と現代ギリシャの代表的な民俗学者ステファノス・イメロスは述べている。ちなみにこのイメロスはアテネ・アカデミーの民俗学研究所の所長の職にあるが、ナクソス島フィロティ村の出身である。八〇歳をこえた彼の父親が、今もフィロティ村の教区司祭をつとめてゐる。このフィロティの隣村であるアピラントスは、住民の出自がクレタ島ということもあって、言語・風俗の点で島内でユニークな立場を保ってきた。そのため民俗学者の考察や研究の対象になることも多く、たとえば一九三七年にすでに『ア

ビラントス歌謡集<sup>(2)</sup>が編まれているし、最近もアビラントス生まれの閨秀詩人ディアレクティ・ゼウゴリリグラーズが綿密な注釈をほどこした『アビラントス俚諺集』を公刊して、アカデミーから表彰されたほどである。

もつとも、ナクソス全島にわたって郷土史家ニコラオス・ケファリニアデイスの調査と研究が現在精力的にすすめられているので、近い将来われわれはこの島の村々のフォークローについて、多少とも「系統的」な記述に接しうる可能性もないわけではない。

シロス島はアテネの外港ピレウスからの航程がナクソスのほとんど半分であり、また歴史的な事情もからんではるかに首都との結びつきが深い点で、ナクソスと異なっている。もう一つ、ナクソスのカトリック信者は全島民の〇・五パーセントに満たないのに、シロスでは住民の約半分がカトリック教徒である。面積はナクソスの五分の一にすぎない。

ナクソスに比べてシロスの「近代化」は一段と顕著であり、古いフォークローの多くがすでに失われているが、さいわいミハイル・ステファノスの大部の労作が残されていて、この島特有の風俗と習慣、それに昔から伝承された民話や伝説を知ることができる。ただし、子守歌をとくに集めたもの、あるいはそれについてのモノグラフがまだ存在しない点では、シロス島もナクソス島と変わりがない。

(1) Σ. Ήλιος, Παοαρτίορες ες τερτίου ζουρυς  
εἰς τὸν λαϊκὸν ποικίλων τῶν νότιων Κυκλάδων, Ἀθήνα,

1974, σ. 5.

(2) Γ. Ζευρώδη, Το σβήσιμο λαϊκῶ τραγούδι στῆν Ἀ-  
πέλαδο εἰς Νάξου, Ἀθήνα, 1937, 86 σ.

(3) Δ. Ζευρώδη-Γλέου, Παοαρτίες ἀπὸ τῆν Ἀπέλαδο  
εἰς Νάξου, Ἀθήνα, 1963, 356 σ.

(4) 歌謡の分野ではとりわけコツァーキアと呼ばれる二行詩、ならびに葬礼のさいに歌われる泣き歌の伝統が注目し値するというのがケファリニアデイスの意見である。なおフィロティ村のコツァーキアと泣き歌については拙稿「フィロティ村の日々」および「人魚の贈りもの」で若干触れている。

(5) Μ. Στέφανος, Συρανεὶς οὐκίδες, 2 τ. Ἀθήνα, 1971-

73. シロス島ではテレサ・ダスクゥ女史の格別の協力を得た。彼女自身シロスのフォークローの採集につよい関心をもっているので、ナクソスにおけるケファリニアデイスの場合と同様の成果を期待できるかもしれない。

二

現代ギリシヤ語で子守歌は *vavvoporia* あるは *vavvoporia* (pl. *paipata*) と呼ばれる。ラテン文字で書けば *nanourisma* あるいは *nanarisma* (pl. *rismata*) となる。語源的には嬰兒をあやして寝かしつけるために発する *na-na* に由来すると説明されている。

筆者がナクソスとシロスで採録した子守歌は次の六曲である。

A マルガリータ・ムスタキ 五六歳 女 ナクソス島フィロテイ村 一九七七・一〇・二九

B ロザティ・ケルヴィム 五九歳 女 ナクソス島モニ村 一九七七・一一・二一

C ソフィア・フランギスクァ 八二歳 女 ナクソス島アピラントス村 一九七七・一一・四

D ソフィア・某(姓不明) 八二歳 女 シロス島アノ・シロス 一九七七・一一・一一

E 姓名年齢不明 女 シロス島アノ・シロス 一九七七・一一・一一

F A・マラゴス 年齢不明 男 シロス島エルムポリス 一九七七・一一・一一

歌詞の面でこれらの歌には重複が多いので、典型的と考えられるA、B、Fについて、以下にギリシャ語のテクストとその大意をかかげる。

A 歌い手のマルガリータはフィロテイ生まれでギリシャ正教徒。現在、村の広場で夫とともにコーヒー店「天国」を経営している。二男二女を育てた。

I Κοιμήσου, ποὸ νὰ σὲ γάρῳ, καὶ νὰ σε δῶ μετὰλο,  
καὶ νὰ σὲ δῶ τῆς παντρειᾶς, κτ'ἀκόμια πὸ μετὰλο.

II "Εἶλα, ἔπνε, καὶ πάρε το, καὶ γλυκὰ ἀποκοιμησέ το.

III Ὁ ἔπνος θάψει τὰ μαρὰ, κ'ὁ κάμπος τὰ βοσκάδια,  
καὶ μένα τὸ παιδάκι μου, τὸ θρόνονε τὰ γάδια.

IV Νάνι νάνι νάνι νάνι, κ' ἔπνου τὸ ποιεὶ νὰ γιάνει.

V Κοιμηταὶ τὸ παιδάκι μου, κ' ἔρω τὸ ναυουρίτω,  
καὶ τῆν κοῦνια του κοῦνω, καὶ τὸ γλυκοκοιμίζω.

(II) "Εἶλα, ἔπνε, καὶ πάρε το, καὶ γλυκὰ ἀποκοιμησέ το.

VI "Ἦνε μου, ἔταρε μου το, κ' ἔμε το στὰ πρεβόλια,  
καὶ τῆν ποδιά του γέμισε τραντάφυλλα καὶ πόδια.

VII Τὰ πόδια νὰ 'ν' τῆς μάνας του τὰ μῆλα τοῦ μπαμπὰ  
του,  
καὶ τ'άσπρα τραντάφυλλα νὰ εἶναι τῆς νομάς του.

VIII "Εἶλα, ἔπνε, ἀγάκι-ἀγάκι στὸ παιδίῳ μου τὸ κεφάλι.  
"Εἶλα, ἔπνε, ἀγάλασέ το καὶ γλυκὰ ἀποκοιμησέ το.

IX Κοιμησου καὶ παπέγγεια στῆν Πόλην τὰ ποικιά σου,  
στῆν Βενετιά τὰ ποῦχα σου καὶ τὰ λουσαφανά σου.

(IV) Νάνι νάνι νάνι νάνι, κ' ἔπνου τὸ ποιεὶ νὰ γιάνει.

一 おねむり、私を喜ばせ、大きくなって見せておくれ  
もっと大きくなって、大人になって見せておくれ。

二 眠りの精よ、この子を連れていき、ぐっすりむねらせて  
おくれ。

三 眠りが子供を育ててくれる、野原が羊を育ててくれる。  
小さな小さな赤ん坊は、なでてやるほど大きくなるの。

四 ねんねんころり おころりよ、病気があったら治るのよ。

五 私の赤子はすやすやねむり、私は子守歌をうたうのよ  
ゆりかごをゆすってあげて、やさしくねかしつけている。

(二) 眠りの精よ、この子を連れていき、ぐっすりねむらせて  
おくれ。

六 眠りの精よ、この子を緑の園に連れていき  
胸にかけたエプロンをバラの花でみたくしておくれ。

七 赤いバラは母さんに、リンゴをもらいだら父さんに、  
白いバラを摘んだときには、名付親への贈物。

八 眠りの精よ、しのでおいで、この子のおつむに、

この子をやさしく抱いて、ぐっすりとねかしておくれ。

九 ねむりこんだら詠えましょ、都へはお前の嫁入支度、  
ヴェネツィアにはお前のおべべとキラキラ光る寶石を。

(四) ねんねんころり おころりよ、病気があったら治るのよ。

B これを歌ったロザティの出身地は不明。モニ村のはずれ  
で夫とともに観光客相手の土産品屋を開いているものの、夏場は  
知らず、シーズン・オフには開店休業にひとしい。子供はなく、  
他人の赤ん坊のために子守歌をうたったという。ギリシャ正教  
徒。

I "Yrae rod kalopis ta raðia ki' yea ta megaloúta,  
ki' ti llaúria ki' o Xristos ta kalofylagouera.

II "Eka, úne, tápe to, kai oryí llaín rhyané to.  
lhyané to oroyi meafédes vá maçéte meufédes.

一 子供を連れていく眠りの精よ、子供を元気に大きくして  
おくれ。

聖母さまとキリストさまのおかげで、しあわせな日々を  
むかえますように。

二 眠りの精よ、この子を連れておゆき。コンスタンチノール  
ブルの都の  
緑の園へ連れていき、スマイレの花を摘ませておくれ。

F A・マラゴスは四〇代の男で、カトリック教徒。エルム  
ボリスの裏通りで妻とともにピータ屋を経営している。ピータ  
*phita*とは練粉をフライパンで薄く焼き、よく焙った肉片やタ  
マネギ・トマトなどをはさんで食べるもの。今は中学生の一人  
娘が赤ん坊のとき、彼がよくうたった子守歌だという。母親は  
うたわなかった由。

I Δουὸ σὸν παιδί σὸ στῆ μέση τῆ κοίτης ἔγεις φέετι,  
ναὶ μαρό μου, ναὶ χρυσό μου, ναὶ γλυκό μου.

II Ἡ μαμά σου σὲ κορτάζει, ὁ μπαμπὰς τῆθε θαυμάζει,  
ναὶ μαρό μου, ναὶ γλυκό μου, ναὶ μαρό, μαρό μου.

III Πῶδ σὲ ἔφερε νὰ ἴθους, τῆ γὰρὰ νὰ μὴς χαρίσῃς,  
ναὶ μαρό μου, ναὶ γλυκό μου, ναὶ χρυσό, χρυσό μου.

一 父母にはさまれたわが子よ、お前は二人の暮らしに光を  
あたえた。  
わがおさな子よ、わが黄金よ、かわいい、かわいい子よ。

二 ママはお前をあかず眺め、パパはお前に見ほれている。  
わがおさな子よ、かわいい子よ、小さな、小さな子よ。

三 お前をこの世に連れてきたのはだれ、父母に喜びをめぐ  
んでくれるために  
小さな子よ、かわいい子よ、わが黄金よ、わが黄金よ。

右のテキストからすでに明らかのように、A VIはB IIと非常  
に近い内容をもっている。またここには歌詞を掲げなかったが、  
ナクソスのアピラントス村でテープに収めたCは四節からなり、  
言葉の内容はB I、A III、B I、A VIとそれぞれよく似ている。  
シロス島アノ・シロスのDはその第二、三節はA IX、A Vと一  
致するが、第一節はB Iに近いながらも特色をもっているので、  
その節だけを次に示す。

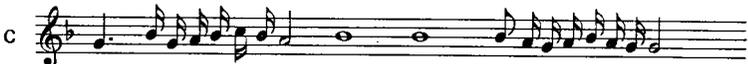
I Ἐλα, ἔννε μου, τάπε το καὶ ἀργίσε μοῦ το.  
Ἄνυ μοῦ το φέερε, ἔννε μου, φέρε το μὲ τῆ γιά σου,  
φέρε το μὲ τὰ γέλια σου καὶ μὲ τὴν ἀμορφία σου.

一 眠りの精よ、この子を連れていき、あとで私にお返し。  
返すときには、すこやかにして戻しておくれ、  
笑顔をつけて、きりょうよしにして戻しておくれ。

同じくシロス島で得たEは第二、三、五節がA VI、A IX、B

A 

B 

C 

D 

E 

F 



I とほとんど同一であるが、他の節に特徴があるので、その部分のみを次に掲げよう。

I *Nau vau vau nau nau tou.*

"Eka, vne, kai nape to kai orou des va to  
brayes,

k'kure to eou, k'kure to keci, k'kure to orou  
mrafidēs.

IV *Thavria pou ki 'Ara 'Eklei diapho theta va  
mou yevet.*

一 ねんねんころり、おころりよ

眠りの精よ、この子を連れておいき、好きなどこ  
ろへ、

どこでもいらわ、緑のしげる園でもいらいのよ。

四 聖母さま、聖ヘレナさま、この子をきりょうよし  
にしてください。

F は言葉からして他のすべての子守歌と全く異なって、  
いわば孤立している。

A と E については、それぞれが単一の、あるいは完結  
した子守歌と考えるべきではないであろう。むしろ言葉

から見る限り、一つ一つの節が独立性をもっていて、歌い手は場合に依り、どれか一つの節を、あるいは二つ以上の節を適宜組み合わせ、うたうのである。たとえばシロスでDを採録したとき、その場に居合わせたある婦人が、D Iは子供が病氣のとき、D II (II A IX) は女の子のためにうたうという解説を加えた。また節の短かさから考えて、A II、A IV、E IVなどは一種のリフレインの役割を果たすのかもしれない。

A I Eの子守歌が言葉の面でこのようにちぎるしい共通性を示すのに対して、メロディーは歌い手によってかなり異なるといえるのが筆者の受けた印象である。このことは子守歌に限らず、キクラデス諸島の独特の二行詩(コツアーキア)、泣き歌(ミロロギア)についてもあてはまるようである。歌詞は同じでも、人により(あるいは部落により)歌われ方がちがうのである。念のために、六つの子守歌の曲の歌い出しの部分音楽譜で示しておく(前ページ)。

Fについて一言。カトリックの、しかも男の歌い手からの採録であることばかりでなく、言葉の内容と曲の整い方からみて、これはフォークロアの分野からは除外すべきかもしれない。

(1) M. Στόπος, *To θηριοκόμης τραγούδι*, Αθήνα, 1974,

中巻 E. Στεφανάτος, *To ναυοίσιμα*, σ. 210.

### 三

クロード・フォリエルが一八二四年にパリで『現代ギリシャ

民謡集』を、そしてアルノルト・バツソウが一八六〇年にライプツィヒから『最新ギリシャ民謡集』を刊行した段階では、西欧のヘレニストたちがギリシャのフォークロアへの関心を独占していたといってもよい。おそらくは、ニコラオス・ポリーティスがアテネに民俗学協会を設立した一八八五年をもって、ギリシャ人による自国の口承文芸研究が本格的な第一歩をふみ出した年とみとめることができるであろう。ポリーティスは浩瀚なギリシャ伝説集と俚諺集を立てつづけに編纂したあと、一九一四年に『ギリシャ歌謡選』を上梓した。これは名著とうたわれて、その後何回も版を重ねる。『歌謡選』の長所の一つは、フォークロアの中でもとりわけ可憐な子守歌を独立したジャンルとみとめて、七篇を収めたことである。これがあたかも先例となつて、たとえば五〇年代にベトロプロスが編集した上下二巻の『ギリシャ民謡集』も二四篇の子守歌をまとめて収載したし、四〇年代から今にいたるまで何回かにわたってアテネ・アカデミーが刊行している民謡集でも、かならず子守歌が「子供のための歌」の一グループとして一人前の扱いをうけてきた。一九五三年にはサレヤンニスが子守歌だけの詞華集を編んだ。それは従来各種の民謡集に収められたり諸雑誌に発表されたギリシャの子守歌の中から代表的なもの八四篇を選んだものである。ただし、このアンソロジーにはなぜかキクラデス諸島で採録された子守歌は一つも含まれていない。

管見の限りでは、既刊の民謡集でナクソスとシロスの二つの島で聞き取られた子守歌を収めているのは次の二点だけである。

一 スピリダキス、ベリステリス共編、アテネ・アカデミー付属民俗学研究所刊『ギリシヤ民謡集』第三卷、アテネ、一九六八。

ナクソス島アピラントスで一九五三年に書きとられたもの二篇。ともに楽譜つき。第一のものは同じ村で筆者が得た前記Cの第三節に近いが、第二のものはコンスタンチノールとキオスのほか、ナクソスにある二つの山の名を歌いこんでいる。すなわち、「ザースとファナーリの山がそびえている限り、主なる神がお前を守ってくださいるように……」がそれであるが、全体としてその歌詞は前記AとFとは全く異なっている。メロディーも同様である。

二 エレン・フライ編、アメリカ・フォークロア協会刊『大理石の打穀場』テキサス大学、一九七三。

シロス島エルムポリス市で編者が六〇年代に聞き取ったもの。やはり楽譜つき。これは筆者が同じシロス島で採録した上記Dの第一節のヴァリエーションともいべきもので、その大意は、「子供を連れていく眠りの精よ、この子も連れていっておくれ／小さなこの子をあげるから、大きくして戻しておくれ／高い山のように大きく、糸杉のようにすんなりと伸び／枝々が東から西にひろがるように」メロディーの点ではDと同一とみることが出来る。

サレヤンニス編の子守歌集は、すでに述べたようにキララデスの子守歌を含まないといえ、ギリシヤ本土の各地方からクレタ、ドデカネーズ、ロードス等にいたるまで、広くギリシヤ

全土の多少とも知られた子守歌をすべて網羅していると考えられる。前節に掲げたAとEの子守歌をこのサレヤンニスの詞華集、あるいはここには収められなかった他の民謡集の中の子守歌と比較してみれば、キララデス諸島で現在うたわれている子守歌が他の地域のものに比べて際立った独自性をもつとは言えないことがわかる。AとEをそれぞれ節に分けて考えると、語句にわずかな相違がみられるものの、全体としては各節ともいづれかの地方のものと一致するからである。その相違の程度を一例によって示せば、

A三 眠りが子供を育ててくれる、野原が羊 *tá boukália* を育ててくれる

C二 眠りが子供を育ててくれる、太陽が牛 *tá boukália* を育ててくれる

ポリティス『歌謡選』一五〇番  
眠りが子供を育ててくれる、野原が羊 *tá boukália* を育ててくれる

サレヤンニス『子守歌集』二七番<sup>(4)</sup>(キオス島)  
眠りが子供を育ててくれる、太陽が仔牛 *tá mouyágha* を育ててくれる

とはいえ、A IX・D II・E IIIにみられるように、華美な衣服と寶石をヴェネツィアに注文するというようなモチーフは、キクラデス諸島(あるいはエーゲ海の島嶼部)に特有なものといえるかもしれない。この節については他の地方に類似の表現をもつものを見出せないからである。これはおそらく、十三世紀の初頭から十六世紀の中葉におよんだヴェネツィア人によるこの地方の支配という歴史的背景と関係があるにちがいない。

前述アカデミー版『民謡集』第三巻に載せられた子守歌のように、ザース山やファナーリ山を歌いこんだ子守歌がナクソス島あるいはアピラントス村に特有のものであることは明らかである。筆者は今回の調査ではこの歌を聞く機会に恵まれなかった。偶然に左右されることの多い短期のフィールド・ワークのためもあるが、同時に、ラジオやテレビジョンをはじめとする大量情報伝達手段のめざましい発達による社会生活の急速な変化も考慮しなければならないであろう。子守歌のようにある意味で人間の生活に最も密接に結びついたフォークロアですら、現代では短期間にはげしい変化を蒙らないという保証はないのである。

(1) *I. Zropidaris kai S. Pliartaris, 'Ekipura Ormu-*

*ruki parobdia. r. I<sup>a</sup> s. 385—387.*

(2) E. Frye, *The Marble Threshing Floor*, p. 223.

(3) N. Holkrys, *Eklogai arò ra parobdia tou èllypikon naou, 'Aðyia*, 1966<sup>s</sup>, s. 186.

(4) Ø. Sageridaris, *Nauoiqimara, taxtaqimara, rai-ruðara, 'Aðyia*, 1953, s. 13.

(一橋大学教授)

\* われわれの現地調査にさいしてあたたかい援助と協力を惜しまず、ギリシャ人の *philoxenia* (して翻訳すれば *hospitality* か) の何たるかを示されたナクソスとシロスの方々に拙稿を捧げます。またギリシャ語の理解を助けてくださった森安達也氏と福田千津子さんに感謝します。

\*\* 本稿は昭和五十二年度科学研究費補助金(海外学術調査—現地調査)「地中海の島嶼における文化交流の影響」および昭和五十三年度科学研究費補助金(海外学術調査総括)「地中海島嶼における都市・農村生活の構造の分析と島嶼及び外部社会の交渉の機構の研究」による研究成果の一部である。